

## 創作と事実の間で紡ぎ出されたフランス映画『ショコラ』(2016): 黒人道化者が問う「笑い」

佐々木 裕 子

2016年2月、フランスで一般公開された映画『ショコラ』(*Chocolat*, 2016)は、フランスの歴史家で、19世紀から20世紀にかけてのフランスの移民状況について多くの研究書を出版しているジェラルド・ノワリエル氏(Gérard NOIRIEL, 1950-) <sup>1</sup>が2012年に出版した『黒人道化師ショコラ: フランス初の黒人芸人の忘れ去られた歴史 (*Chocolat clown nègre: L'histoire oubliée du premier artiste noir de la scène française*)』<sup>2</sup>の本からインスピレーションを受けて制作されており、ノワリエル氏自身も脚本への執筆協力をしている映画作品である。

ノワリエル氏の著書の副題通り、今となつてはフランス世間から忘れ去られてしまったが、ショコラと呼ばれ19世紀末から20世紀初頭にかけて、後にベル・エポック(*Belle époque*)と言われる時代に、サーカス界の人気者だったショコラと呼ばれた実在の黒人道化師ラファエルとそのコンビの相方であるイギリス出身の道化師フティット<sup>3</sup>を主人公にした映画作品である。この作品の監督は、俳優としても知られるロシュディー・ゼム(*Roschdy Zem*)<sup>4</sup>で、主人公のショコラとフティットは、それぞれフランスの国民的俳優オマール・シー(*Omar Sy*)とチャーリー・チャップリンの孫としても知られるジェームス・ティエレー(*James Thierrée*)が演じている。

本稿で、敢えてショコラに「黒人」とつけるのは、彼が黒人であるがゆえに当時のパリ大衆にとって「エキゾチック」な道化師としてサーカスの人気者になり、黒人であるがゆえに被った個人の人生があるからである。ショコラが今日「忘れ去られてしまった」とはいえ、フランス語表現として今日のフランス人たちの会話のでもたまに耳にする「ショコラだ/である(*être chocolat*)」という言葉は、1890年から1910年にかけてフティットがショコラ

に仕掛ける数々の悪ふざけが由来となっており、相棒フティットが仕掛ける悪ふざけによってショコラが置かれた状態から転じて辞書では「当てが外れる、一杯食わされる」と定義されている。現在は、「しまった!」や「やられた!」という意味で使われる場合が多いだろう。ショコラの名が形容詞となって今日のフランスにも息づいていることは、2人のスペクタクルがフランス語表現の一部となるくらい当時相当な人気を博したことを物語っているといえよう。映画の父と言われるリュミエール兄弟が2人を撮っているのも人気の証といえる<sup>5</sup>。

さて、この映画作品が実在の人物を忠実に描いた作品かと言えば、そうでもない。むしろ、資料に基づいた事実が「歪められている」と言ってもいいだろう。しかしながら、史実を敢えて変更したものであるのなら、私たちは監督や映画製作者たちの創作意図に思いを馳せながら、映画作品を創造的に解釈できるという余地を残している。

### 1). ラファエルの生涯

映画について言及する前に、まずは、ノワリエル氏が紹介するラファエルの経歴について概観してみよう。ラファエルは、キューバのハバナで1860年の半ばに奴隷の子として生まれた。彼が奴隷出身であるとわかるのは、彼が生涯身分証明書を有していなかったからである。正確な出生年はわかっていないが、1866年から1868年頃と推定されている。ラファエルのファミリーネームは、死亡時の記録では、パディヤ(*Padilla*)となっているが、「De Lefos」や「Patodos」と記されている資料もあり、実際のファミリーネームは未だ明らかになっていない。1875-1880年にスペイン人の裕

福な植民者に売られ、キューバを去りスペインのビルバオ (Bilbao) という町に近い彼の生まれ故郷に使用人として連れて行かれた。そこで虐待を受け、逃亡した後は、炭鉱員、ボーイ、港湾労働者となり、最終的にはヨーロッパで最も有名なイギリス道化者の一人であるトニー・グリス (Tony Grice) の使用人として働くことになった。その後、彼のサーカスに帯同して荷物係として働くことになり、曲芸師の代用もするようになった。1886年にトニー・グリスと共にパリにやってきて以降、ラファエルは、相棒フティットと共にパリ中の人気者となる黒人道化師ショコラとなるのである。ショコラは、病気の子供達のいる病院を回って道化師として子供達を笑わせていたという。国民的大スターだったショコラであるが、晩年は世間から忘れ去られ、1917年にボルドーで亡くなっている。

## 2). 交錯する事実と創作

では、映画の中では、どのようにショコラについての史実が変更されているのか？本稿では以下2点のことについてだけ言及するにとどめる。

第1点目として、ショコラは、映画に描かれるような身分証明証がないことによって警察に捕まり拷問を受けたという事実はない。身分証明証がなかったことは事実であったが、その件で警察沙汰になることはなかった。ノワリエル氏の著書によると、ラファエルは、キューバからスペインのビルバオ近くの植民者の家に使用人として売られた後、「彼を白くさせよう」と住民たちから拷問を受けていたという。警察官たちがショコラを捕まえた後、「奴を白くしろ！」とデッキブラシで痛めつけるシーンは、ビルバオでの拷問に基づくものと考えられる。

第2点目としては、ショコラがシェイクスピアの悲劇作品であるオセロの主人公を演じ、失敗するシーンが描かれるが、そのような事実はノワリエル氏の著書には記されていない。ショコラが演じたのは、イタリアの作曲家ジ

ュゼッペ・ヴェルディがシェイクスピアの『オセロ』を基に作曲したオペラ作品としての『オテロ』のパロディである。このことは、ジャーナリストであり、小説家でもあるニコラ・ミッシェル氏が、Jeune Afrique のインターネットサイト上でも言及しているように、ラファエルは、確かに演劇俳優として失敗しているが、それは1911年にエドモンド・ギロー (Edmond Guiraud, 1870-1961) の演劇作品『モイーズ (Moïse)』を演じた時である<sup>6</sup>。台本を読めない、覚えられないことで酷評されたと、ノワリエル氏の著書には記されている。

それでは、これら実在のショコラの「歪められた」事実から、私たちは何を読み取ることが可能なのか？

身分証明証がないことによって明らかになる不法滞在、いわゆるサンパピエ (sans-papiers) によってショコラが捕まえられるという事実はないが、滞在許可証を持たない不法滞在者＝サンパピエとして警察に捕まえられる移民は、今日数多く存在する。サンパピエの状態を黙認の上で、レストランや建設業、清掃業に従事させられる移民が多数いるのだ<sup>7</sup>。映画の主人公ショコラから、今日の移民の不遇な状況が想起させられるということは、ショコラが演じているのは、ショコラ個人としての人生だけでなく、フランスに存在する多くの移民の状況でもあるのである。

映画におけるショコラの俳優としての失敗に関しては、黒人として笑いものにされたくないという意志の下、ショコラは俳優として『オセロ』の主人公を演じることを決意する。これまで、大衆の笑いを得ることでショコラとしての地位を確立してきたが、自己やその社会的地位を自問自答する場面が映画の後半以降に描かれるのである。これらのショコラの史実の変更は、映画上でのストーリー展開の必要性と共に、史実上のショコラを超えてヨーロッパの植民活動以降今日に至るまでの黒人の置かれた状況とその道徳的観点を示しているといえよう。

## 3). 黒人知識人ヴィクトル

ショコラに自問自答のきっかけを与えるのは、監獄でのヴィクトルとの出会いである。ヴィクトルは、映画の中でショコラを諭すハイチ出身の黒人知識人として描かれており、ショコラとの出会い後すぐにショコラにお説教をするという唐突な登場であり、あっさりと消えてしまう謎に包まれた存在である。映画上の想像上の人物であろう。

ショコラは、身分証がないことで、警察に捕まり拷問を受けた後、ヴィクトルと同じ部屋で獄中生活を送ることになる。政治思想犯として捕らえたハイチ人ヴィクトルと議論する中で、ショコラは、自分の置かれた立場を自問自答し始めるのである。ヴィクトルは、ショコラの成功が、白人たちによる侮辱を意味しているという。ショコラがフティットに叩かれても喜んでいる姿は、ニグロはニグロの社会的地位に留まり、背中を曲げて鞭で打たれるのを待っていることを意味するといふのである<sup>8</sup>。ショコラは、それは黒人たちが自由ではなかった時代で昔のことであると、反論する。ヴィクトルは、白人たちは、黒人たちは自由で平等であると信じこませているが、それは幻想である、黒人たち自ら、自分を防御し、戦わなければならないと、ショコラに訴えるのである。ショコラは、自分は戦士ではないし、戦わない、自分は、フティットから叩かれて喜んでいる芸ばかりではなく、パントマイムもやるし、人々を演じるし、動くし、ダンスもする、自分はアーティストであると主張する。ヴィクトルは、アーティストであるとはそんなことではない、と反論する。アーティストというのは、突破口を開くもの、模範を示すことであるといふことを伝えたところで、ショコラは、監獄を出ることになる。

ショコラは、ヴィクトルに反論して黒人たちが自由でなかったのは、過去のことであると言うが、このセリフは、全ての人間は自由で平等であると思っている現代人を代弁した皮肉なセリフであろう。というのは、ショコラが黒人道化師として活躍していた時期にバ

リにいた黒人はごくわずかで、むしろ、黒人が好奇の目にさらされていた時代であるからだ。当時パリにいた黒人エリート層はハイチ人が占めていたという<sup>9</sup>。映画の想像上の人物ではあるが、黒人知識人として描かれるヴィクトルがハイチ人という設定になっているのは、ノワリエル氏のこの記述に沿ったものなのかもしれない。映画の中で、ショコラが後に事実上の妻となるマリーと植民地博覧会に行くシーンが描かれているが、この時期は、「文明化の使命」を掲げる第3共和制が、現在では人間動物園 (zoo humain) と呼ばれる、「野蛮」な人種を見世物にしていた時代である<sup>10</sup>。1877年に、パリのブーロニユの森にあるアクリマタシオン庭園 (Jardin d'acclimatation) で、様々な民族を「展示」することによって、多くの人々が訪れたという<sup>11</sup>。1889年には、パリで開催された、エッフェル塔が建設されたことでも知られる万国博覧会で、「黒人村」パビリオンを設置して以降、西洋から見て「非文明」とされる人々が、次々とフランス各地で開催される植民地博覧会で展示されるようになった。人間を見世物にするという行為は、19世紀から20世紀にかけて、植民地政策と並行してその政策を正当化する装置として、フランスに限らずヨーロッパ各国で開催されたものである。ショコラが、植民地博覧会で見世物にされている黒人に話しかけられる映画のシーンは、黒人道化師として白人の見世物になっているショコラが、白人から見世物にされている黒人と自分を重ね合わせ、自分の行為を内省するシーンとして描かれているといえよう。

映画上で描かれるヴィクトルの存在は、フランスにおける黒人問題に関心がある者として興味ふかい存在である。彼から、フランスの黒人問題に関わる歴史上重要な人物を数名想起させるからである。

まずは、ヴィクトルが監獄にいるという点について。監獄でヴィクトルと同じ部屋に入れられたショコラが、「政治思想犯ってだけで捕まるのか？」と、ヴィクトルに問うシーンがある。この問いに対して、ヴィクトルは、「それで死ぬんだよ。」と答える。この二人の会話

のやり取り、ヴィクトルが置かれた監獄という状況からは、ハイチの独立指導者で、ナポレオン軍に捕らえられフランスで獄死したトゥサン・ルヴェルチュール (Toussaint Louverture) を想起されるのである。

次にヴィクトルという名であるが、なぜ想像上の人物にヴィクトルという名を与えたのだろうか、と疑問が浮かぶ。ヴィクトルという名から思い浮かべるのは、フランスの小説家であり政治家でもあったヴィクトル・ユゴー (Victor Hugo) もいるが、黒人問題という観点からすると、この名は、1848年の奴隷制廃止を宣言したヴィクトル・シュルシェール (Victor Schoelcher) を想起せざるにはいられない。

最後に、黒人知識人として常に本を片手に持ち、ショコラにシェイクスピアのおセロを演じるようアドバイスをする姿からは、シェイクスピアの戯曲作品『テンペスト』の翻案劇『あるテンペスト (Une tempête)』(1969)を書き、黒人としての自覚を意味するネグリチュード (négritude) という造語を作り出し、1930年代以降のフランスにおける黒人文学運動を牽引したエメ・セゼール (Aimé Césaire) が想起されるのである。演じる俳優の眼鏡、顔つきがどことなくセゼールに似ていると感じるのは、気のせいだけではないだろう。「ニグロは立ち上がるんだ (Un nègre, ça se dresse)」というヴィクトルのセリフもあるように、ルヴェルチュール、シュルシェール、セゼールの三者を想起させるヴィクトルから、制度的、モラル的に黒人の地位向上のために人生をかけた人々の軌跡を思い描くのである。

#### 4) 「笑い」とは何か？

ヴィクトルとの会話でも議論になる、「アーティストであるとはどういうことか」という問いは、道化者として生きるショコラ自身に、そしてこの映画の観衆にも「笑いとは何か？」という問題を提起している。

この映画が2010年に公開された映画『黒いヴィーナス (Vénus noire)』と比較されるのは、双方の映画が、世間の見世物にされた黒人を

主人公として描き、西洋諸国の文明化の暴力性を示し批判している点が共通しているからであるが、「笑い」というすべての人間が行う行為を様々な観点から描いている点にこの映画のオリジナリティがあるといえよう。このことは、ノワリエル氏が、2016年に出版したショコラ研究に関する追記エッセイでもある『ショコラ：名無し人の真実の歴史 (Chocolat : La véritable histoire d'un homme sans nom)』の中でも言及しているように、若い人々に向けて差別の問題について関心を持ってもらおうと友人アーティストたちと一緒にちょっとしたスペクタクルを創作しようとした時、「人種主義を批判することによって、お決まりの道徳的な議論になることは避けたかった<sup>12)</sup>」と2009年のショコラについての資料を収集し始めた時のことを回想しながら語っている。おそらく、『ショコラ』の映画製作者たちもそのことを意識して制作しているのだろう。西洋文明批判的な側面は背景に置かれており、この映画の主要なテーマとなっているのが、「笑いとは何か？」なのである。

「笑い」は、誰もが行う行為であるが、人が笑うのは、一般的に「おかしい」という感情からくるものである。道化師は、自らおかしい行為をし笑われることによって、人々を楽しませる人物である。しかしながら、フティットとショコラがコンビとなって、人気を博したのは、白人と黒人というコントラスト故、2人は、人種の差異が示された白人道化師と黒人道化師コンビとして世間から注目を浴びるのである。彼らのスペクタクルが、観衆に笑われるのは、彼らの行為がおかしいからであるが、単におかしいからなのではない。白人フティットが黒人ショコラを叩くことによって笑われるということは、黒人として笑われるということが内包されており、白人の優越性が示されているのである。

映画の中で、また「笑い」に関する別の側面も描かれている。ショコラとフティットが病院で、病気の子供達に芸を披露するシーンである。子供達の笑いは無垢な笑いであり、子供達を和ませている。ここでの笑いは、病

気の子供達にとってセラピーとして機能している。

道化者として人々に笑われること、黒人として人々に笑われること、その笑いが誰のためのものであり、どのように機能しているのか。この映画の中では、史実に基づいたショ

コラの歴史が重要なのではなく、ショコラと言われた一人の男性の苦悩、黒人であるがゆえに被った歴史を描きながら浮かび上がってくる様々な笑いを通して、笑いの残酷さと重要性が示されているのである。

## 注

<sup>1</sup> ノワリエル氏の著作で日本語翻訳で読めるものとしては、『フランスという坩堝：一九世紀から二〇世紀の移民史』大中一彌、川崎亜紀子、太田悠介訳、法政大学出版局、2015年 (Gérard Noiriel, *Le Creuset français: Histoire de l'immigration XIXe-XXe siècles*, Points, 2016 [2006]), と『歴史学の<危機>』小田中直樹訳、木鐸社、1997年 (Guillaume Garner, « Sur la « crise de l'histoire », Vingtième Siècle. Revue d'histoire, vol. 59 / 1, 1998, p. 161-164)がある。

<sup>2,3</sup> George Footit (1864-1921): マンチェスター生まれ。ノワリエル氏の著作によると、フティットは、戸籍上の登録表記は、Footit となっている。しかしながら、当時は Footit や Footitt と表記されることが多かった。Chocolat (2016), p. 10.

<sup>4</sup> Roschdy Zem (1965-): 俳優としては、2006年のカンヌ国際映画祭で『デイズ・オブ・グローリー (フランス語タイトル *Indigènes*)』で男優賞を受賞している。

<sup>5</sup> DVD『ショコラ (Chocolat) 』(2016) の補足映像の中で、リュミエール兄弟が撮影した

ショコラとフティットが写っているすべての動画作品 (N°1138-N°1143) を観ることができる。

<sup>6</sup> <http://www.jeuneafrique.com/>

<sup>7</sup> このような移民事情は、ショコラを演じたオマール・シーが主演した映画『サンバ (Samba)』(2014) の中でも描かれているのでこちらも参照いただきたい。

<sup>8</sup> この「叩かれて喜んでいる (battu et content)」ショコラというのは、実際のショコラの典型的なイメージであり、食品流通メーカーのフェリックス・ポーション (Félix Potion) は、1922年にショコラのこの典型的イメージ利用してオリジナル商品であるチョコレートのパスターを作っている。

<sup>9</sup> Gérard Noiriel, *op. cit.*, p. 33-37.

<sup>10</sup> 人間動物園に関しては、(Nicolas Bancel, Pascal Blanchard, Gilles Boëtsch[et al.], *Zoos humains: Au temps des exhibitions humaines*, 2004.) で詳しく知ることができる。

<sup>11</sup> Gérard Noiriel, *op. cit.*

<sup>12</sup> Gérard Noiriel, *Chocolat: la véritable histoire d'un homme sans nom*, Bayard, 2016, p. 9.

(本研究所研究員)